

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：32413

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03074

研究課題名（和文）幼児の食事行為の獲得と社会化 - 境界線を越える意味とおとなの支援

研究課題名（英文）Acquisition and socialization of eating behavior in young children : Adult support in helping children move across the scene

研究代表者

上村 佳世子 (Uemura, Kayoko)

学校法人文京学院 文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号：70213395

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児が自立した食事行為を獲得するために、どのような知識やスキルを獲得するのか、そのためにおとながどのような支援を提供しているのかを明らかにすることを目的とした。幼稚園の食事場面における、3-4歳児の保育者やクラスの子どもたちとの相互行為を観察した。同時に、保育者と母親を対象に子どもの食行動やしつけに関する調査を実施した。その結果、子どもの食事に対する意識や食スキプトの獲得は、仲間と協働してつくる食事環境と保育者の子どもの年齢に応じた支援が重要な機能を果たしてした。さらに、子どもの発達期待や食事の支援への意識は、家庭と幼稚園ではお互いを補い合う形でとらえられていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児の食事場面への参加は、社会的行為としての摂食の意味を理解し適応的な行動スタイルを獲得する機会である。本研究のこの食事場面におけるおとなの関わりの適切性が、子どもの食材や調理、食器等の安全な使用、食事のマナーの獲得を促進するという結果は、保育現場における発達年齢に応じた教育・支援や食事環境の設定に有効な知見になる。子どもの摂食行動への親と教員それぞれの認識の共通性や差異が明示されたことも同様である。また、さらなる分析により、幼児期の食スキプトの獲得過程における、子どもの食事の自立性、認識や会話内容の質的变化を解明できるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify what awareness and skills young children gain to acquire independent eating behavior, and what kind of support adults provide for this. The interactions of 3-4-year-old children with their teachers and other children were observed in their class during mealtimes at kindergarten. At the same time, a survey of caregivers and mothers regarding children's eating behavior and discipline was conducted. The results showed that the mealtime environment created in collaboration with peers and teachers support provided by s according to the age of the children played an important role in children's awareness of eating and the acquisition of eating scripts. Furthermore, it was suggested that expectations for children's development and awareness of mealtime support are perceived in a mutually complementary manner at home and in kindergarten.

研究分野：心理学

キーワード：食事行為 幼児 幼稚園 おとなの支援 相互行為 観察

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

人間は文化的環境のなかに生まれてきて、既に生活している他者やそこにある道具とかかわりながらその環境に適応していく。食卓においても、子どもは親が意識的に選択し与えた道具に触れ、話題を他者と共有し共同行為を実現している。

Valsiner(1987)は、社会文化的な行為としての食事に焦点をあて養育者をはじめとする他者による食器や家具などの道具が導入され、他者と共同構成(co-construction)される場面のなかでその態度が獲得されるとした。家族との食事場面は、子どもが食べ物や食器を文化的に適切に使用するという目標に向けて、社会的に構成されると考えた。外山(1991; 2008)は、どのような食事概念や手続が必要かという食事のスキプトに焦点をあて、食事の手順、生理的意味、社会的意味の分析から、日常的活動への参加や母親との相互行為により意味づけられることを示した。

おとなと共有する食事場面に参加することは、食事の社会的行為としての意味を理解して適応的な行動様式を獲得し、食材や調理、その道具の安全な使用や危険の回避のスキルを理解する上で足場づくり(scaffolding)として機能している。申請者のこれまでの研究は、食卓における社会的相互行為を食事環境との関連で縦断的に観察・分析し、幼児期の食スキプト獲得過程のなかで、子どもの食事における自立性、認識や会話内容に質的变化が顕在的に示唆された(上村・加須屋・吉澤, 2017; Yoshizawa, 2017)。

### 2. 研究の目的

本研究では、幼児期の子どもがおとなの采配する食事環境に参加し、いずれ自立するために、いつどのような知識やスキルを獲得するのか、そのために親や教員、家庭や幼稚園の生活環境はどのような支援を提供しているのか、さらに、子どもは複数の場面間を横断し連関させ、どのような食事行為や認識を形成するのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、幼児(3~5歳児)をもつ母親を対象に意識調査をおこない、食事に関する子どもへの教育・支援内容や環境設定について、幼児期における発達の変化を検討する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 幼稚園の食事場面の観察と教員への面接調査

2 幼稚園の 3~5 歳児の計 4 クラスの園児を対象に食事場面の観察、教員への面接調査を実施した(4 歳児については縦断的な実施となる)。食事場面の観察は月 1 回とし、教室にカメラ 2 台を設置した上で、観察者が筆記記録を取った。教員への面接調査は 7 月末と 2 月末に実施し、調査内容はすべてトランスクリプションを起こし、テキストマイニング分析を行った。また、食事場面発達時点ごとにプロトコル分析をおこない、仲間同士の会話のテーマや展開、教師の介入やその背景にある教育的枠組を検討した。

#### (2) 母親および保育者の意識調査

幼児(3~5歳児)をもつ母親 200 名、保育園もしくは幼稚園でクラスを担当する保育者 150 名を対象として調査を行った。調査は、子どもの食事行為への発達期待、子どもの食事行為および食卓での問題行動について web 調査をした。母親と保育者の意識の共通性と差異を検討し、幼児期の食事の意識と行動スタイルの発達の変化の時期やその要因を探索した。

### 4. 研究成果

#### (1) 3 歳児クラスの給食スキプトの獲得と保育者のことばかけ

3 歳児クラスにおける食事場面の観察を行った。その結果、給食における食事行為の一連の流れは、子どもたちが獲得すべきスキプトとして、保育者の指示によって手がかりが提示され、かつ教師と子ども双方から確認がされながら活動が進んでいた。全体活動の進行に影響しないおかつの増減、食事中の会話、食後の活動などについては個別の自由がかなりの部分で認められていた。

保育者の全体的指示以外に、「食事の受け取り時」の指導や対応は 7 月に 9 回であったものが、10 月に 5 回に減少し、内容も前者はグループ名を呼ばれて来ない子どもを個別に促すものであったが、後者ではそうした働きかけはなくなり、ご飯の量の調節や落とした食器の始末に関することであった。「食事の開始」以降の食事では、7 月に 24 回、10 月に 9 回、食器の片づけについては 7 月に 7 回、10 月には 2 回と、それぞれ指示や行動修正のことばかけが減少した。以上のように、子どもたちの給食スキプトの理解が進むことで行動系列の計画が立つようになり、保育者のトラブル対応や個別指示の必要がなくなったことも示唆された。

#### (2) 4 歳児クラスにおける給食当番スキプトの獲得

7 月からグループ毎の給食当番が開始された 4 歳児クラスの、食事場面の観察を行った。その結果、給食当番のメンバーにとって観察当日は、導入から 1 週間が経過しており、その意味の認識は形成されているようであった。当番がかかわるのは、給食スキプトのなかで食事の運搬、

食事の配布と配膳と最後の食器の返却の箇所で、これまではクラス全員に声をかけて希望者がおこなっていたものであった。また、食事の配布については、保育者が各テーブルに順番に声をかけて取りにくるよう促していたが、受け取り損ねる子どもが出るなど混乱が生じる場面でもあった。役割を設けたとはいえ、4名の当番者は実際には自主的に動けることは少なく保育者の具体的な支持が必要であり、スープなど重くて暑いものは保育者がこれまで通り配布していた。

当番の導入によって生じた子どもたちの食事行為の変化は、以下のようなものであったと考えられる。まずは、配膳活動時に帽子を被って立ち働く当番者とそれを待つそれ以外の子どもたちの差別化が表れ、保育者や子ども同士でも言語化されることで役割が意識化される状況ができた。さらに、子どもたち同士での食器の数やメニューや食材とその配分量についての発話の頻度が高くなるなど、食事行為に積極的にかかわる態度が示されるようになった。結果として、食事時間が短縮され子どもの食事行為の個人差も少なくなった。保育者の給食場面へのかかわりは、当番役割の運営のために当番者とそれ以外の子どもの行動統制が加わったことで、むしろ増加したものと考えられる。一方で、保育者の各子どもの給食場面参加への方向づけが減少したことから、当番制の導入が子どもたちの食事行為の自立に機能したことが示唆された。

### (3) 給食場面の会話への子どもの参加

3歳児クラスの子ども(園児)と保育者(保育補助者)の平均発話数を比較すると、保育者がテーブルで会話に入っているときは、子どもと保育者がほとんど同程度に発話に参加していた。一方の保育補助者では、食事の片付けやトラブル処理などで半分の時間しかテーブルについておらず、そこでは子どもの発話の発生が少なくなった。このことから、保育者の発話参加が、子どもの発話や会話の維持に大きな役割を果たしていることが示された。同様の傾向は4歳児クラスのテーブルにも示されたが、保育者が席を外している間に子ども同士の会話の発生頻度が高くなり(仲間同士の会話の発生:3歳児 教師在3.5、不在0; 4歳児 教師在4.0、不在3.5)、子どもによる話題提供および会話の維持スキルの発達が示された。

会話の話題については、3歳児クラスでは、食事内容やマナー、食事行為の維持(お代わりや食べ物を残すかなど)が大部分を占め、その他に園内外の活動経験(クラスの制作作品、家族など)、近隣のイベント(お祭りなど)のテーマでの話題が保育者の在籍条件で12.5テーマが視聴された。4歳児になるとテーマはさらに多岐に渡り、各会話の持続時間の長かった。子どもの会話スキルの発達とともに保育者の枠割も変化が示され、4歳児に比べて、3歳時クラスでは食事行為と会話すべてに指向と受取、軌道修正という点で統制の機能を果たしていた。

### (4) 4歳児の幼稚園における給食場面とおやつ場面の比較

4歳児クラスの2場面で比較すると、以下のような特徴が示された。

a) おやつ場面では摂食開始時の挨拶は全体であったが、食べ終わった子どもから片付けを行っていたのに対し、給食場面では最後にクラス全員で「ご馳走さまでした」の挨拶をしており、開始と終了が明確な協働場面として意味づけられていた。b) 給食場面では量の多少の選択はあるものの、子どもたちはほぼ同じものを食べているのに対して、おやつ場面では種類を選択する、自分たちで皮をむく、配分するなどの作業が子どもたちに課されており、摂食という点では選択の自由があることが示された。c) 給食場面では比較時間をかけて摂食を行い、会話も目の前の食事内容や園での遊び、自身の生活に至るまで話題は多岐にわたっていた。それに対して、おやつ場面では開始時に歓声上がるものの、摂食が開始されると会話は少なく食べることに集中し、おやつ場面が子どもたちにとって楽しみな時間であることが示唆された。

以上のように、この2つの場面は子どもたちにとって異なる意味をもち、そこで獲得される食事行為の様相には違いがあることが明らかになった。

### (5) 母親と保育者の幼児の摂食行動への認識の違い

子どもの食事行為への発達期待、子どもの食事行為および食卓での問題行動、子どもへの発達期待について幼児をもつ母親と、園においてクラスを担当する保育者と対象に意識調査をおこなった。その結果、母親と保育士のいずれも「配分された食事を残さない」「食事中は立ち歩かない」など、摂食の基本となる項目には同様に高い反応が示された。逆に、母親は「食べ物を理解する」「好き嫌いをなく食べる」「食事中は立ち歩かない」「食べ物が口に入っている間はしゃべらない」など、食物や調理の理解、テーブルマナーに注意が向いていたのに対して、保育者は「仲間と話をしながら食べる」「友人が食べているから食べてみる」など、集団生活や仲間への意識を促進することを意識していた。子どもが参加する2つの場面における摂食行為で異なる認識や行動スタイルが獲得されることが期待されていることが示していた。

このことは、幼児が家庭および園の食事場面において異なる経験をしていること、さらに複数の場面を越えて行き来することにより子どもがより豊富な認識や行動スタイルを獲得し、それを統合しながら発達していくことを示唆している。

#### <引用文献>

外山紀子(2008). 発達としての共食:社会的な食のはじまり 新曜社

上村佳世子・加須屋裕子・吉澤千夏(2017). 幼児のままごと遊びの発話にみられる社会文化

の共有課程 日本発達心理学会第28回大会, P3-58

Valsiner, J. (1987). Culture and the development of children's action: A cultural-historical theory of developmental psychology. *John Wiley & Sons*

Yoshizawa, C. (2017). What are 3-year-old children talking about during the lunch time? The 19th Biennial International ARAHE Congress 2017 in Tokyo

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉澤千夏・上村佳世子・加須屋裕子
2. 発表標題 食事場面における幼児と保育者のやりとり - 4歳児の給食場面とおやつ場面の比較を通して
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 上村佳世子・加須屋裕子・吉澤千夏
2. 発表標題 幼稚園における給食場面の会話への子どもの参加
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上村佳世子・加須屋裕子・吉澤千夏
2. 発表標題 幼稚園4歳児クラスにおける給食当番スキプトの獲得過程
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上村佳世子・吉澤千夏・加須屋裕子
2. 発表標題 幼児の食事行為の獲得と社会化(1)～(2)
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉澤 千夏  (Yoshizawa Chinatsu)  (10352593)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授   (13103)	
研究分担者	加須屋 裕子  (Kasuya Hiroko)  (60296291)	学校法人文京学院 文京学院大学・人間学部・教授   (32413)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------